

S. McKay, 2011, "Response 1: Scientific Method in Social Policy Research Is Not a Lost Cause," *Journal of Social Policy*, 40: 21-29.

(S. マッケイ, 2011, 「応答 1: 社会政策研究における科学的方法は見込みのない企てではない」)

序文 (p.21)

- Spicker (2011)¹への応答であるこの論文では、社会政策研究が原因と結果にもとづく研究戦略を放棄すべきであると説得することに Spicker が失敗していると論じる。
- Spicker の主張がより弱い形式をとっている——すなわち、経験についてよく考え、理論の構築や検証における文脈の役割を気にかけることが最良の研究実践であると主張しているのならば、彼は社会政策研究においてすでに真だとされ、疑いの余地なく有益な何事かについて提案をしていることになる。

フロネシスを推奨する論拠のあらまし (pp.21-22)

- Spicker 論文の議論の運び：
 - (1) 社会政策研究（とりわけ政策目的のための研究）は、研究成果が一般化されうるという考えにもとづく。このことはより広く社会科学全般にもあてはまる。
 - (2) 一般化は、「原因と結果」の世界観にもとづく。こうした見方は、演繹や帰納、批判的実在論といった異なる研究方法論の根拠になっている。
 - (3) 因果的な説明は、「必然的結合」の観点からはじまり、より確率論的な説明、物語的な説明にいたるまでさまざまな種類がある。
 - (4) 因果的な説明は、哲学的な探究や、社会現象の複雑さにもとづけば、当てにならないものであり、ある問題への政策的な対応を形成するうえでつねに役に立つとはかぎらない。
 - (5) 社会政策研究は、存在論において相対主義的な立場をとるのではなく、あくまで 1 つの目標として一般化を追求しなければならない。
 - (6) フロネシス (Phronesis) は、社会政策上の問題を理解する際の一助となりうるような一般化をもたらすための選択肢を提供する。またそれは、因果的な説明に依拠することとはまったく異なる。
 - (7) 良い一般化を悪い一般化から区別するやり方として、良い一般化は、(a) 理論ではなく証拠から出発し、(b) 他のフィールドの実例によって相互確認され、(c) 当の社会的文脈におけるプロセスについてのものである。

¹ P. Spicker, 2011, "Generalisation and Phronesis: Rethinking the Methodology of Social Policy," *Journal of Social Policy*, 40: 1-19.

- ステップ（1）について、社会政策研究がつねに一般化可能性の考えにもとづいているかどうかについては議論の余地があり、実際に多くの研究が人びとの経験についてのきわめて局所的な理解と解釈を目的にしている。しかし、一般化可能な知見に到達することを明示的な目的としている研究領域に焦点を当てて、Spicker の議論に異を唱えることは可能である。
- ステップ（2）は Spicker の議論の標的に関するものであり、彼の議論の核心ではない。ステップ（5）に反論したいという向きもあるかもしれないが、本稿の分析では、一般化が研究プロセスの最終的な成果であることは自明の真実として受け入れる。
- 以下では、Spicker の議論の重要なステップである（3）、（4）、（6）、（7）について順に議論する。

ステップ（3）（4）：因果へのアプローチとその問題（pp.22-24）

- 因果性が「必然的結合」であるために要求される基準は、現代の「ハードサイエンス」でも失敗しており、完全な決定論はいかなる科学においてももはや見込みがない。したがって、大多数の者がみずからの経験的な仕事において認める因果的な説明とは、因果性の確率論的な説明である。
- ステップ（4）で、Spicker は Hume を引用しつつ、因果的な説明は当てにならないと主張する。しかし、因果性に関する哲学的な業績は Hume 以降も生み出されつづけているにもかかわらず、その他の哲学的な批判は提示されていない。完全に決定された因果性という考えはもはや信用できないが、これは因果性そのものへの信用が損なわれていることを意味しない。
- 社会現象は複雑なため因果的な分析は困難だと Spicker は述べる。これは彼の議論における要点だが、Spicker はただ複雑性の考えについて述べるにとどまり、それについての議論をあまり展開していない。
- Spicker は、因果的な分析が政策にとって有用な処方箋を提供していないと述べる。しかし、そのことはいわば研究者たちが間違った問題について研究しているということであり、因果分析それ自体になんの有用性もないということではないのではないか。

ステップ（6）：社会政策におけるフロネティックな一般化の疑わしき特殊性（pp.24-26）

- Spicker は Flyvbjerg²（2001）を引用しながら、フロネシスにもとづく社会科学を要求している。Flyvbjerg の業績は政治学の分野で影響力があるが、論点の 1 つは、Spicker 論文が Flyvbjerg の業績やそれをめぐる議論における用語をどこまで社会政策に適用して

² B. Flyvbjerg, 2001, *Making Social Science Matter*, Cambridge: Cambridge University Press.

いるかという点である。政治学の分野でも、社会政策におけるフロネティックな社会政策の考えを批判するうえで有用な応答が見られる。

- さらにいえば、社会政策研究は、Flyvbjerg（2001）が定量的な社会科学について議論する際に取り組んでいたような問題を抱えてはいない。社会政策分野の大多数は、研究が「われわれが生活する地域や国家、さらにはグローバルな諸集団にとって重要な問題に取り組むべき」であり、「われわれの研究成果を仲間である市民に効果的に伝え、彼らのフィードバックに注意深く耳を傾けなければならない」という Flyvbjerg の主張に同意するだろう。
- この点は、量的分析やフォーマルモデル、ハードサイエンスが主要な学術誌や研究機関において支配的であるような分野とは対照的である。イギリスの社会政策の雑誌にそのような事情は見られず³、むしろ量的・統計的な能力が不足しているというのが実情である可能性が高い。
- Spicker はフロネシスの例として、失業と疾病給付とのつながりを挙げているが、これがフロネシスの例であるといえるのはなぜなのかについて議論を展開していない。「失業の増加が疾病（あるいは障害）関連給付への要求の増加をもたらす」という仮説は、因果的な仮説であり、経験的なテストの対象であるように見える。

ステップ（7）：良い一般化を悪い一般化から識別する（p.26）

- Spicker は、良い（あるいは妥当な）一般化を、悪い一般化から区別するやり方に関心を払っている。しかし、そこでの彼の言明は、普遍的な原則（universal principles）を頼ることに回帰している。
 - 一般化は法則（laws）の形式をとることはできず、必然的に文脈に限定されると主張したうえで、Spicker は、それにもかかわらずいくつかの一般化は真実ではないと断言する。これは、特定の状況やある文脈にのみ適用されるようなものではなく、むしろ強い普遍的な主張である。
- しかし、Spicker 論文の他の箇所でも論じられているように、一般化がつねに特定の文脈や状況に従うのだとすれば、いくつかの種類一般化は真実ではないと主張することは不可能である。

³ この点の例証として、著者は E. Smith の 2008 年の論文を参照している。Smith は、教育学・社会学・ソーシャルワークの学術誌において、二次分析あるいは量的手法を用いた論文がどれほどの割合で掲載されているかを示している。すべての掲載論文のうち、量的手法を用いた論文の比率は、教育学の雑誌で 31%、社会学の雑誌で 17%、ソーシャルワークの雑誌で 27% となっている。E. Smith, 2008, "Pitfalls and promises: using secondary data in educational research," *British Journal of Educational Studies*, 56(3): 327.

結論（p.27）

- 社会政策研究は量的アプローチに支配されてはならず，研究者たちは一般に社会の主流から象牙の塔へと切り離されてもいない。むしろ社会政策研究における潮流は，フォーマルなアプローチや統計的な方法からよりいっそう離れ，解釈的なアプローチへと向かっていると思われる。